

ボクと妹のいる風景 東京

く ありがとうママンより く



平成二十三年

十二月

上演台本

作

天衣織女

演出

市堂令

《プロローグ》

喪服の婦人たち

登場人物

婦人 1
婦人 2

兄 月島玄一郎
妹 月島幸子

オニ

ウラジミール
エストラゴン
黒子

ふたりの婦人は対峙している。婦人はもうひとり婦人を呆然と見つめていたかと思えば、突然歩きまわりそして止まり、また婦人を見つめ再び歩き出す。その顔は驚いているような、少し怒っているような、それでいて少し笑っているようにも見える。

婦人1
ええ？ええーっ？……うわあ……うわあ……ええーっ？

婦人1はようやく言葉を口にする。

婦人1
どなたですか……どなたですかと聞かれたらどうする。
名前を言えばいいじゃない。

婦人2
「え？」と聞き直されたら……どうする。

婦人1
もう一度名前を言えばいいじゃない。

婦人2
それでも聞き返されたら……どうする。

婦人1
遺族です。3年前に亡くなった……こちらの遺族です、と言えればいいじゃない。

婦人2
……遺族……でも、どういうご関係のご遺族ですか？と聞かれたらどうする？

婦人2は、少しだけ自分の心の中を見つめ、やがて誇らしげに話し出す。

婦人2
……息子です。アタシ、3年前に亡くなった……あの人の息子ですっ……って言えればいいじゃない。

ふたりは動かない。

シーン1

兄 あー、チクチクするうー。あーチクチクするうー。もおーっ。

兄はハイヒールの片方を脱ぎそれを手に持ちケンケンでベンチに近づきすわる。そしてそのハイヒールをひっくりかえし、中に入っているらしいチクチクの原因を振り落とそうとする。

兄 もおーっ。

妙に声が裏返っている。オカマである。

兄 妹 兄 チクチクするーっ。

ねえゲン兄ちゃん、どうするの？ 行くの？ 行かないの？

ちよっと待ってよー。もおー、さつきからずーっとチクチクしてるのよ。こんな時にもおー、いい加減にしてよね、もおーっ。

妹 兄 ちゃん！

妹は、人目を気にしているようである。

兄 妹 ええ？ もおー、ママの三回忌と足のこのチクチクとがアタシの人生の中で、さつきから一線にあるっつーの。なーんかこう情けないっつーの。

ゲン兄ちゃん、何わけのわかんないこと言ってるのよ。ほらお坊さんがお堂に入っていくよ。私先に行くからね。

兄はあわててハイヒールをはき立ち上がる。

妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄
サツちゃん、サツちゃん、サツちゃん、サツちゃん、
もおーなにつ。

結局どう思うわけ？
なにが。

だからあ、アタシがママの三回忌に出ちやうこと。
(非常に小声で)：じゃない、出ちやったもんは。

はい？
(少し大きい声で)：たないじゃない、出ちやったもんは。
はい？

(大声で) しかたないじゃない、出ちやったもんは！
なにそれ。

：だってしかたないじゃない：出ちやったもんは：
なにそれ。アタシのこと、「おなら」あつかいしないでよ。それにね、まだ出ちやってないわけ
じゃない。

め！い！わ！く！

一瞬ふたりは動かない。遠くでカラスの鳴き声がする。

妹 兄
め！い！わ！く！

兄はウーッと小さくうなると突然その場にしゃがみ込む。少しブルドックのようにも見える。

妹 兄
ウーなんです！
：スカートはいた兄ちゃんなんて、めいわく！

妹 兄 妹 兄

ウーなんで！
スカートはいて化粧してヤンキーずわりしている兄ちゃんなんてめいわくなの。
ウーなんで！
ママの三回忌なのに…なーんかこう…めいわくなの！

わずかの間

ひどーい。今日いっしょに三回忌に出ようって言ったのサツちゃんのほうじゃない。
だってそんなかっこうで来るとは思わなかったんだもの。

わるいわけ？

わるいわけ！

うそ！

なにそれ。

一人で来る勇気がなかったからアタシさそったくせに。

なにそれ。

サツちゃんのこと勘当した。パパの顔一人で見る勇気なかったくせに。

そんなんじゃないわよ。

ママのお葬式出なかった兄と妹だから、せめて三回忌だけは世間の冷たい風を受けてでも一緒に

出ようねって、アタシ誘ったくせに。

あの時はね、ママのお葬式出るなって…パパに言われたの。私あのとママのお墓でひとり自分

なりにお葬式したのっ。ゲン兄ちゃんだって…パパに来るなって言われたんでしょ…。

そうよ…言われたわよ。"女" やってる息子なんか来なくていいって言われたわよ…。

間

妹兄妹兄妹兄妹

そんなんじゃないわよ。
え？

今日来たのはね……

なによ。

ママに言いに来たのよ。

なにを？

……わかんない……

間

妹はゆっくりベンチにすわる。兄もとなりにすわる。遠くでカラスの鳴く声がする。

あれ……なんで勘当されることになっちゃったんだっけ。
え？

サッチャンなんで勘当されちゃったんだっけ。あの時。パパが真っ赤な顔して、なんとかーってサッチャンに怒鳴ったでしょ。あれ、なんでだっけ。

怒鳴った、怒鳴った。

あれ確か十二月だったのよ。アタシ、サラリーマンやってるってみんなに嘘ついてたから、一応有給休暇ってめいもくであの時実家にいたのよ。大変だったのよ、十二月に新宿のお店お休みするの。

ゲン兄ちゃん、あの頃からオカマやってたの？
うまれた時から。
え？

妹兄妹 兄妹兄妹兄

おネエ！
へ？

オカマじゃなくて、おネエ！

どうちがうの？

どうちがうの？ つつたつてオカマはオカマよ、おねえはおねえ、女装家は女装家、ちんどんやはちんどんやよ。

ふーん。で、いつぐらいまでそれやるの？

はっ？

だから何歳ぐらいまでそれつづけるの？

死ぬまでよ。

ふーん。

わかってない。

わかってない。：しかし、ま、サラリーマンの息子が新宿で女装してお店に出てるって知ったら

あの頃のパパ脳天から血吹いて怒りだしてたわね。

そうそう、あの時もそうだった。

え？

サツちゃんが勘当された日。

ああ。

パパ、ワイングラス、(自分の胸の辺りをさすりながら) サツちゃんのこの辺になげちゃって、

サツちゃんのこの辺ピンク色になっちゃって…。

ゲン兄ちゃん胸あるの？

フェイク。

フェ・イ・ク…??

あ、あれクリスマス・イヴの夜だった。アタシ、イヤダアーはつきり思い出しちゃった。サツち

妹兄妹兄妹

やんの背景にちようどクリスマス・ツリーがチーカチーカしてて、なんだかアタシ悲しい構図だ
なって思ったもの。

ゲン兄ちゃん：

息子もけんざい！

ム…ス…コ…

パパ、すごかったわね。火がついたみたいに怒り出して。あれ原因何だったんだっけ。

うーん…原因？…うーん…なーんかこう…価値観っていうの…なーんか価値観ガタガタなこと

パパ、私に言ったのよ。だから私もなーんかこう、価値観ガタガタなこと。パパに言い返したよう
な気がする…うーん…思い出せないなあ…：…へんなのお…

へんなのお。…あの時、ママ悲しそうにかたまってた。ママはいつもあんな時、悲しそうにかた
まってた。

そうね。

兄妹

それで…サッチャーン行っちゃった。みぞれの降る中、小さいカバンひとつ持って行っちゃった。
あの時ママはかたまったままサッチャーンを見送って、かたまったままワイングラスかたづけけた。

それから3年して本当にママかたまっちゃった。
え？

…：…スママセン…

兄妹

突然お寺の鐘がなりだす。

さ、行きますか。

行きますか。

妹兄妹

勘当された妹と、スカートはいた兄ちゃんと…行きますか。

ふたりは動かない。

シーン
2

暗転の中、兄の声が聞こえてくる。かなり興奮しているようだ。早口である。

兄 あーっ、あつたま来たーっ。あーっ、あつたま来たーっ。

照明がつくとさきほどのベンチは美しいシンプルなソファに変わっている。

兄 サツちゃん、あがらせてもらっちゃうわよ。おじやましまーす、おじやましましたーっ。サツち

やん、サッチちゃん、サッチちゃん、見た？あの正和兄ちゃんのお嫁さんの目つき、見た？顔の角度変えないで、目だけでアタシのこと頭のとっぺんから爪先まで見て、またとっぺんまで戻って何度も往復してから、薄ら笑いしたでしょ、あのヌリカベ女！あの笑いはね、あたしや社会のメジャー側の人間よフンフン。ダンナも作って、子供も作って大きな社会コーケンしてるんだ。あんたたちマイナー側の人間たちと席を一緒にするなんて、あー恥だ恥だ” って顔よ。サッチちゃん、これ、どこかければいいのか？

自分のコートを突き出す兄に、奥の部屋から登場してきた妹はコートかけを指さす。そして兄の話聞きつつ、持ってきた自分の部屋着に着替え始める。

兄 あ、ここ？あーっ、あつたま来たっー！

振り返ると妹が着替えているのに気付き、じっと見つめる兄。

妹 あ、失礼！えっ？わかんない話だな…わかんないな。

ブツブツと呟きながら、奥の部屋に消える妹。

兄 へへへ…なんの話だっけ…あ、そうそう、あのヌリカベ女んちのガキども、アタシのこと「オ

カマ、オカマ」って指差しやがって。日頃、正和兄ちゃんとヌリカベ女がアタシのことなんて言っただけで話しているか、あれ見ればずうえーんぶ（全部）想像できるわ。ったくう。（隣の部屋の妹に向かつて）サッチちゃん、あそこんちの上のガキなんてったっけえ？

（声）ダイヤ。
え？

妹

妹 兄 妹 兄 妹

(声) ダイヤ。
ダイヤ？字どう書くの？
大きいに、弓矢の矢。
なんだそれ…あの下のおバカなガキは？
モンド。

そう言いながら再び登場してきた妹は室内着に着替え、手にはフアンシーな動物型のスリッパ、それを兄の足元に置く。自分も動物型をすではいている。

あゝモンドだ。字どう書くのよ
主人って書くの。

ふーん…えっ？ダイヤモンド！

そうじゃない。

バツカじゃなかるうか。(スリッパに気付き) イヤーン、カワイイッ！

兄は鼻にかかった声をあげ、ピョンと軽くジャンプしてそれをはく。おネエなのである。そしてしゃべり続ける。

兄

あのヌリカベ女、自分の子供に外人の名前つけちゃって。「これからは国際的に通用する名前がいいと思ってつけましたのよオホホホ」バーカア。なんで国際的になることが外人の名前をつけることになるんだよ。それっておかしいよねえ、サツちゃん。

兄がしゃべっている間、妹はとてつもなく大きなバスケットを取って来たようだ。

妹 うっ。

妹はその中に入っていたフランスパンを割り兄へ差し出す。兄はそれをなんとはなしに受け取りつつひとりでしゃべり続ける。

兄 だいたい日本人っておかしいのよ。自分たちのこと、ヨーロッパ人かアメリカ人の延長線上にいるって思っているのよ。どっぷりアジア人じゃないよねえ。サッチちゃん。うっ。

兄 今度はセロリを取り出し、それをひねり切って兄に差し出す。兄はそれを受け取ってしゃべりつづける。

兄 だいたいなによお。正和兄ちゃんの今日のあの態度。アタシのことアッチチャーって顔して見て、アッチチャーってアッチの方見たきり、ずっと知らんふりじゃない。やっぱりあれよねえ。兄弟なんてさ、しよせん兄弟なんてさ、大人になればさ、他人と同じって言うけどさ、他人よりタチ悪いわよね。他人はさ、タ・ニ・ンって言うぐらいのもんでさ、他人でいいわけじゃない。兄弟よお！昔々、同じ食台で御飯食べて、一緒にテレビ見て、一緒に風呂入ってたわけじゃない。よい情けないやら腹立たしいやら。

妹は今度はリングゴを素手で「うっ」と真つぶたつに割って兄へ差し出す。それを受け取りながらもその妹の殺つ気を感じた気がして

兄 あ…ゴメンナサイ…サッチちゃんは別よ。やっぱり男の兄弟は当てにならないわ。やっぱり女の兄妹が一番よ。
妹 あ、冷蔵庫にアボカドがあった気がするう。

兄
サツちゃん、もういいわよ。そんなに食べられないわよ、サツちゃん！

妹は舞台奥に消え、そこから「ソーレ、ソーレ」の掛け声とともにアボカドを兄に投げて渡す。兄は「サツちゃん」を連呼しながらそれを必死に受け取る。妹は今度はダイコンを両手に持ちビュンビュンとまるでヌンチャクのように振り回しながら登場する。兄はあわててソファの影にかくれようとする。

妹
うっ。

妹は自分の太ももでダイコンを真つぶたつに割り、兄へ差し出す。兄は「ケッコウです」と首を振り、妹は「そう？」という表情で一口かじる。

あまーい！

サツちゃん：

あまーい！

サ、サツちゃん：

っーんときて、あまーい！

サツちゃん、しつかりして！

む？

サツちゃん的生活って、どんなん？

なにが？

なんかこう、えらい、めっちゃシンプルやおまへんか？

そないでつかあ。

妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹

妹 兄

妹はこれからたえずポリポリとダイコンを食べ続けていく。
せやかて、あんさんとこなんも、こう、生活臭ちゅーの？ あらしまへんでえ。
そないでつかあ。

兄もソファーに戻りバスケットの中の物をポリポリと食べ始める。

あんさん何屋さんやってまんの？

フリーター屋さんでおますっ。

あらまあ。

この前まで病院の掃除屋さんを早朝やってただけど、くびになった。

おやまあ。

朝、4時半に起きるの何度か挫折しちゃったし、患者さんに私の掃除のしかた気に入られなかつ

たみたい。

まあまあ。

多分、もう少しすると夜のビル掃除か工事現場の交通整理はじめると思う。

ママミヤママミヤ。

ゲン兄ちゃん、聞いている？

聞いている聞いているう。

ゲン兄ちゃんは？

アタシ？下北の八幡湯の隣でつぶれかけのバーを一軒と、つぶれかけの出版社の週刊誌のお悩み
コーナーってのを一つ持つてるわ。あ、それよりサツちゃん、サツちゃん、サツちゃん、これは？

兄は親指を突き出す。

妹 兄 妹

兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹

む？

オ・ト・コ。

今出かけてる。

いやだあ、サツちゃん。はやくそれを言つてよお。サツちゃん、サツちゃん、サツちゃん、どんな男？ねえ、テレビで言うど誰的な感じ？

7年ぐらい出かけてる。

アハハハ、もう、水商売でもそんな古い冗談使わないわよ。いないんでしょ、もうおっしやいよお。：そうじゃないかと思つたわ：どーもいそうにないもの。

明日、陽市のふとん干そうかな。

7年つて言やあオギヤーつて生まれたガキがいつぱしの口きくぐらいになる年月よ：サツちゃん、それはいないのと同じなの。

そうかなあー。

そうよお。いやだあサツちゃん、わけわかってないんじゃないの？

さ、そこなのよ。わかってないらしいのよ。私、どーもなーんも、わかってないらしいのよ。なにが？

この世のしくみ。

この世の：しくみ：？？？

突然声をはりあげる妹。

「分け入っても分け入っても青い山！」

？
こうやって、こうやって、こうやって、ズンズンズンズンズンズンズン前へ行つても青い山だら

けなのよ、まわりが。
え？

熊本に残してきた家族のことは脳のこの辺にチツとあるんだけど、それでもやっぱりズンズンズン前へ行くしかないわけですよ。すると目の前にあるのはやっぱりただただ青い山なわけですよ。ズンズンズンズン、ズンズンズンズン、すると突然ポンと目の前に道がひろがる。そうすると山頭火は思うわけですよ。「まっすぐな道でさみしい！」

サツちゃん、何言ってるのよ。

サツちゃん、何言ってるのよ。

山頭火！

え？

日本のアツチコツチを托鉢しながら俳句作った人！

？

「ほろほろほろびゆく わたくしの秋」ほっと月がある 東京に来ている「うしろすがたのしぐれて行くか」「しぐるるや 人のなさけに涙ぐむ」

アタシ、わからない！

なんでわからないのよ。「まっすぐな道でさみしい」よ。まっすぐなのよ、まっすぐ。道がまっすぐなのよ。さみしいじゃない。

わかんない！

なんで！

なんか、わからない！

なんで！

わかりやすいのがいい！

わかりやすいのがいいっていったって…。私…重いよ。

妹 兄 妹 兄 妹 兄

なにが？

地球の重力。

サツちゃん：それじゃ嫌われるよ。ダメダメダメ。あのねーそんな高尚かつ腹のたしにならない話ばっかりしちやダメよー：あーしちやったんだ別れ話ん時。

ゲン兄ちゃん重くなーい？

え？：重力が？：感じないわねえ…。

するよ、するする、ほらほら。

兄は「重力感じ踊り」を始めた妹のその様子をジツクリみて

そんな人だったんだ、サツちゃんって。

え？

かわりもん。

そう？

兄妹って不思議なもんねえ。お互い知ってるつもりがなんにも知らないで大きくなるんだわ。

なんやかんや言っても、なんやかんや苦労しても、なんやかんや偉くなってもみんな死んじゃう

のよ。野球選手も石川遼も山頭火も。

か、かわりもん：あんた、いくつ？

三十八

ハア？おばさんじゃん。いつ何時何分にそんなことになっちゃったのよ。

妹はまだ踊っている。

妹

自分は四十六（しじゅうろく）のくせに。

兄 妹 兄

えっ？
おじさんじゃん、おじさんじゃん、おじさんじゃん。
おだまり、もお。

妹は「おじさんじゃん」「おじさんじゃん」とつぶやきながら、なおも「重力感じ踊り」を踊っている。

兄

それよりサッチャン。

兄は妹の腕をとってなだめようとソファにすわらせる。

いつからなの。
え？

「重力が気になってしかたない病気！」
病気？

さ、さ、さ、正直に話してごらんなさい。なんでも聞いてあげるから。お店でも聞き上手の「アンジェリーナ」で通ってるんだから。

アンジェリーナ…？
そう。アンジェリーナ・タキ。さ、さ、さ、話す話す。何があつたのかアタシがドッキリ聞いてあげるから。

ドッキリ…って…そうね…あれは…
水商売の世界のね、特におネエの人生相談はね、そりゃ、いりくんでるものなのよ。特に恋愛問題はね。さ、話す話す。
うん…、あれは私が小学二年の…

妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄

トラウマ！トラウマ！

？

松子の話。六本木の「青い不夜城」の松子の話。あれはもう、トラウマ以外のナニモノでもないわ。彼女中2の時にバス通学してたんだってサ。で、そこでよく話すようになってた二才年上の高校生おさむ君となんと、付き合うことになったんだってサ。そんなある日、星流高校の科学部だったおさむ君から「春の星座を見に行こうよ！」ってトウキョウタワーのデートに誘われたんだってサ。デートだよあんたデート！も、も、も、天にも昇る気持ちよ。で、制服だけど精一杯おしやれして、バラのオーデコロンなんかつけちゃって。とうとう日曜日のある日、出掛けたんだってサ。空には：夕日をあびた雲のふちが金色のリボンになってたなびいててサ、まるでルーベンスの絵のようだったって。そしてその雲の向こうからファンファーレが聞こえたような気がしたって。で、赤や緑のビーズにふちどられたトーキョウタワーがだんだんだん近づいてきたらサ、突然ギョツとおさむ君が手つないできたんだって。も、も、も、顔から火吹いてジェット気流で天まで昇っちゃったらしいわ。で、とうとうトーキョウタワーの入り口に着いたらサ：ドヤドヤドヤって：ドヤドヤドヤって星流高校の制服を着た男子が出てきて：クラッカーやテープを松子の顔に向けて投げつけてきたんだって。：「おかま、おかま、あく気持ち悪い〜」って。その中で一番笑ってたのはおさむ君だったんだってサ：チャンチャンって話。大変だったわね。

あ、アタシじゃないわよお。松子、松子の話よ、もう。あ、深呼吸、深呼吸、ヒーヒーヒー。さあさあサッチャん、話す話す。

いやいや、オラの話なんぞ貧相で貧相でしょーもねー話でござえますだ。

なに訳のわかんない冗談言ってるのよ。サッチャん、アタシシリアスなのよ。

：あ、シリアスね：そうですね：あれは：私が小学2年の春休みでした、あたりの空気は桜色にかすみそうなポカポカにあたたかいある日、私は友人数名と町に冒険に行きました。そこは小さな小さな町ではあったのですが、もつと小さい小さい私たちには、大人無しのお出かけは大冒険

兄 妹 兄 妹 兄

であり、その町はおそろしく大きな迷宮のように思われました。
サツちゃん、かいついまんでかいつまんで。
了解了解。あそこに前田書店ってあったでしょ。
あったあった。
その前にスクランブル交差点あったでしょ。
あった。あった。

妹は突然かん高い声で歌い出す。

妹 兄 妹

♪とーりやんせ、とーりやんせ、ここはどここの細道じゃ、ピポピポピポ♪私、あそこの交差点
で突然バンバンバンって、重力感じちゃったのよ。
ど、どんなふうに。

もう体の中の節々が重たくて重たくて、息まで苦しくなっちゃって、目の前真っ白くなっちゃって、
友達みんなポソポソって横断歩道渡って行くのに、私にはとうてい向う岸には遠すぎ
て渡れそうになかったのよ。そして私思ったの。『人生これから大変だ！』
サツちゃんそれ病気だわ。ネガティブだもん。

なによお。小2の時にそう思ったのっ！

ネガティブシンキングサツちゃん、それじゃもてないよお。

関係ないでしょ。

あるわよ。

関係ないっ！

あーるっ！

なーいっ！

妹 兄 妹 兄 妹 兄

“ピンポーン” ドアのチャイムが鳴る。

妹
はーい。

妹と兄はお互いに「ない」とか「ある」とか言い合いながら妹は玄関のある方へ消える。そして岡持を持って戻ってくる。

松源の天ぷらうどんだあ！
え？

創業百三十二年の松源の天ぷらうどんだ。ゲン兄ちゃん、たのんだあ？

たのむわけではないですよ。

サツちゃん、食べたーい。

だめよ。誰かこの辺の人がたのんだんだから。

サツちゃん食べたーい。

幸子、返すの！

だってこの辺の道入りくんでてなかなか見つからないってすっごく困ってるみたいよー、出前のお兄ちゃん。サツちゃん食べたーい。
だめなのっ。

兄は妹の岡持を取り上げて玄関の方へ消える。

兄
妹
(声)ごめんなさいね…あらっ！ほんとにごめんなさい、時間とらせちゃってえ。ここ…サツちゃんここ何号室？
ゴオマルゴオ。

兄 妹

(声) そ、そうなのよ、なんとゴオマルゴオなのよ、ひどい話でしょ。ごめんなさいねえ! ゴオマルゴオで。たいへんよねえ、時間あまりないんでしょ? あ、ごめんなさい。こうしている間も刻々と時はたつてるわけよね。頑張つてね。じゃーね、バイバーイ!

あーあ、サツちゃん松源の天ぷらうどん食べたーい!

すっげカワイイ、すっげカワイイ、すっげカワイイソウ、すっげカワイイソウ。

兄はとても嬉しそうである。その感情を押えたいのだろうが押えきれないほど嬉しそうである。とても興奮している。

兄 妹 兄 妹 兄 妹

サツちゃん、松源の天ぷらうどん食べたーい。

離れて、離れて。すっげ肌ツルツルで、すっげプリプリで、すっげカワイイすっげカワイイソウ。何がかわいくてかわいそうなのよ。

今の松源の出前の、チャン・グンソクイムニダ〜

私、一生かけても、そこるところわからないわ。

あれね、きつとね、うどんがのびちゃって、「新しいの持つてこい」とか「こんな冷めてのびきつたのなんかたべられるかっ」とか言われちゃうのよね。かわいそー。この辺ピンク色にして、この辺汗だらけにして、困りきつた。すっげカワイイ、すっげカワイイソウ。

ゲン兄ちゃん、あのお兄ちゃんのどこがかわいいのよ!

ゲン兄ちゃん、へんよお。

へんじゃないっ!

へーんっ! あのお兄ちゃんはどっちかっていうとマキハラノリユキって感じよ。

サツちゃんはだからダメなのよ。サツちゃんはわかってない。(妹、シユンとする) サツちゃんは、この世のしくみ、なーんもわかってない。

兄 妹 兄 妹 兄 妹

妹 さ、そこなのよ。わかってないらしいのよ。私、どーもなーんもわかってないらしいのよ。

兄は妹の話を横目に舞台中央で叫び出す。

兄 妹 兄 妹 兄

サツちやーん。
：
サツちやーん。
：
サツちやーん。

そう叫ぶと同時に舞台に鳴り響く音楽。それに合わせて嬉しそうに踊り出す兄。時に妖艶に時にコミカルにステップを踏みながらエプロンを付け、お玉や鍋を舞台に運んでくる。やがて二人は鍋に向かい正座し手を合わせる。

兄 妹

いただきまあす。
さ、さ、天ぷらはのってないけど、温かいうちにお食べ。
はあーい。

突然鳴りやむ音楽。舞台に響くのはうどんをすする音だけだ。

ズズズズズズズズズズズズズズズズ

ズズズズズズズズズズズズズズズズ

その静寂をやぶる兄。

兄 冷蔵庫：乾麺とうどんとソーメン一束とめんつゆしか入ってないけど…おたくの食糧事情どう

なってるの？

いろいろ。

ふーん…冷凍庫…ラップに包んだ本がビッシリ入ってたけど…あれ何？

ゲバラ。

えっ？

チェ・ゲバラ。

何それ。

革命家。

ふーん…その奥にラップに包んだママからの手紙の束、冷凍してあるけど…あれ何？

黄ばむの嫌だから。

ふーん…サツちゃん、最近、ブランコ乗ったか？

…ブランコ…???

そうやブランコでおます。

ゲン兄ちゃん、その時々出る大阪弁なんとかしてよ。

ひと休み、ひと休み。

何が？

なんや大阪弁って中性的やんか。男と女の間の踊り場で、ひとやすみでおます。

わっかんない話だなー。ブランコなあ…ないなあ。

あれ耳から手えつつこんで奥歯ガタガタイわせるぐらいメツチャ面白おまつせえ。

うわー、キミベタやなー。

子ども、よー乗るやろ、前 رفتたり後ろ رفتたりするだけやのに。あれはなあ大人にとってのタバコみたいなもんなんや。

そう言いなながらタバコを一本妹に勧め、自分も口にくわえる兄。なかなか見つからないライタ

ーをまさぐる仕草をする。

妹 兄 妹 兄 妹

タバコ……。
そうや……タバコって物思いにふける格好の言い訳になるやろ？社会に対して。
ふーん……
子供もなあ社会から逃れてギョーサン物思いにふけりたいんや。ブランコはその格好の言い訳で
おます。
そやなあ……そない言われてみると……なんやワテも子供の頃そないな風やったような気がするわ
あ……ほんまやな……。

兄、いつの間にかタバコ型のガムをモグモグと食べはじめている。

妹 兄 妹 兄

嘘だよーん！
え？どーいうこと？
今の嘘だよーん！ああいう時は、脳味噌、マツチロケなんだよーん、だから子供でいれるんだ
よーん。へ、へ、へ、へ。
何が嘘なのよー。ねえ。

妹、持っていたタバコを握りつぶして捨てる。

兄 妹 兄 妹 兄

あーだまされたーだまされたー。
ゲン兄ちゃん、カルイツ！
いやだ、また重力の話？
ちがうっ！なんで今日逃げたのよ。
何が。

妹兄妹兄

妹兄妹兄妹兄妹兄妹兄妹兄妹兄妹兄妹兄 妹

お寺の話！お寺のお堂の入り口まで来て、ゲン兄ちゃん「アタシ、とても堪えられないわ」って、
なんで逃げ出すのよっ。
逃げたんじゃないわよ。
じゃあ、なによお。

降りたのよ。

何、それ。

降りたのっ！

訳わかんないわよ。

わかんなくていいわよ。∴「かるい」ってどういう意味よ。

スカート！化粧！

いけないわけえ？

いけないわけえ！ポリプテルス・エンドリケリー。

ハ？

ポリプテルス・エンドリケリー。

ハ？

気の小さい古代魚。テレビなんかに踊らされて、ほら∴あの∴昔でいうカミング・アウトかなんかのつもりでそんな格好でお寺に来たつもりかもしれないけど、そんな考え、ポリプテルス・エンドリケリー。

兄は知らん顔でポリプテルス・エンドリケリー踊りを踊っている。

♪ポリプテルス・なんたらケリー、ポリプテルス・かんたらケリー♪

何やってるの？

悪いわけ？

悪いです！

兄 妹 兄

何よお、じゃ、あのまんまサッチャンお経聞いてたらよかったじゃない。
私はねえ、ゲン兄ちゃんのこと心配して
アーアーアー！

兄は人差し指で両耳に栓をしたりはずしたりする。まるで子どもである。

兄 妹 兄 妹

いい加減にしてよ、子供じゃないんだから。
アーアーアーサッチャンのウソツキー、ほんとはサッチャンを勘当したパパのいるお堂に入っ
て行く勇気なかったくせにい。
何言ってるのよ。私の袖ひっぱって逃げ出したのゲン兄ちゃんじゃない。
アーアーアーアーアー！

自分の話を聞こうとしない兄に、妹は思いあまつて兄の脳天を平手でピシヤリと叩いてしまう。
兄は一瞬目をパチクリしたあと突然泣き出す。

妹 兄

ウワーン、松源の天ぶらうどん食べられなかった腹いせにアタシに八つ当たりしているう。
あーうるさい、うるさい。泣くな、泣くな。

妹はそこいら辺りにあった布で、兄の頭をすっぽり包みこむ。

泣くな、泣くな。そんなに泣くと、お月さまから大きなカマを持ったオニさんがさらいに来るぞ！
そのオニさんって、どんな顔？

田中角栄と山本リンダを足して二で割った顔。

妹 兄 妹

兄は自分で顔の布をとりながら。

兄 妹
なんだそれ。
なんだそれ。

兄は少し笑っている。妹も少し笑っている。すでに大人の顔である。舞台に美しい曲が流れ始める。妹はベランダの窓越しに見えている夜空を見上げ、

妹 「ほっと月がある 東京に来ている」

そしてベランダへのガラス戸を開ける。(ジエスチャー)

妹 ガタピシ、ガタピシ。

途端に都会の喧騒が流れてくる。妹の住むアパートはかなり中心部にあるようだ。風の音に混ざって遠くでパトカーのサイレンの音もする。

兄 妹
ゲン兄ちゃん、電気消して。
あいよ。

兄が電気を消すと(ジエスチャー)一瞬にして辺りは薄暗くなる。しかし月あかりでふたりの影法師ができている。兄も外に出る。

兄 妹
見てみねい、満月が晴れやかに出ましたあ。
(外気を感じながら)うー、姉さん、なんとも風情のあることをいいやがる。おまけに下の階からはドビュッシーときやがった。

ふたりは、じつと月を見上げたまま動かない。

間

ゲン兄ちゃん、1年後、東京はあるかなあ。

：不吉なことを言いやがる。

ほんとに1年後、東京はちゃんとあるかなあ。

リアルな話で？

リアル、リアル、リアルな話です。

リアルな話ってことは…ですよ…、サツちゃん、あの月じつと見てごらんなさい。

なに？なに？

いいから。

妹はじつと月を見つめる。

兄
あの月を：黄色い色紙をまあるく切って、張り付けたように思うんじゃないかって…ほうら、まある
ーい球体、まあるーい球体と思って見てごらんなさい。

妹、無心に見つめる。

兄 妹 兄
ほうら、まあるーくちゃんと、こっち側にポコンとでっばった球体に見えてきたでしょう。
うーん、？？あつ、うんうん。
そしたら今度は、ほうら、薄紺色の空気の中にポカンと浮かんで見えてきたでしょう。

妹 あー、ほんとだ。ボツと光って、ポカンと浮かんでる。

ほんの少しの間。

妹 うーうー気持ち悪い、うーうー気持ち悪い！

妹は小刻みに体をねじっている。

兄 あれをリアルというんだよ。

兄 ゲン兄ちゃん、リアルって気持ち悪いっ。

兄 そうでしょう、そうでしょう。

兄 ゲン兄ちゃん、ゲン兄ちゃん。

兄 む？

兄 あの月…実は向う側にグワツってえぐれてたりして。

兄 む？

兄は一瞬、月をじっと見つめる。

ほんの少しの間。

兄 うーうー気持ち悪い、うーうー気持ち悪い。リアルとは、ひよっとして、そういうことでもあるのかもしれない。

二人の兄妹は“うーうー”と小刻みにツイストをする。とても気持ち悪がっている。“ピ
ンポーン”ドアのチャイムが鳴る。

妹 ふうあーい！松源の天ぷらうどんだーっ、松源の天ぷらうどんだーっ、うーーー
兄 まだ天ぷらうどん食べたいわけ？チャン・グンソクイムニダー。うーーー

妹はジェスチャーで電気を付け、兄はガタピシガタピシとベランダのガラス戸を閉め、ふたりはくつついたままツイストしながら玄関の方へ消える。

妹声 どーもおー

妹は大きな段ボールを持って戻ってくる。

妹 ♪黒ネコヤマトオー、黒ネコヤマトオー♪
兄 かわりもん。

兄は箱に貼られているステッカーに気付く。

兄 あら、いやだ。パパからだわ。なんでサツちゃんの住んでるとこ、分かったんだろうね。

妹 私、おしえたから。

兄 えー！意外な展開っ。

妹 私ねえ、一応なんだからわからないけど、パパにはちゃんと、年賀状だけは出しています。

兄 へー・・・意外な展開。

妹、いそいそと箱を開ける。その中身を見た兄は

兄 嫌味なオヤジィー。アタシの住所わからないもんだから、アタシの持物、サツちゃんのところに

兄 妹 兄 妹 兄 妹

送り返してきたんだわ。アラッ、イヤダー！ッこれ、アタシの高校の部活ん時のよお。ほんとかあ。なつかしーねえ着てみて着てみてえ。
いやよーっーいやいや。
いいじゃない、着てみてよー。なんだか死ぬほど見てみたいの。
いやよーいやよーいやいやっつてんだろ。
玄一郎様、どうぞおネゲエしますだ。着てみてくださいえ、おネゲエしますだ。
いやっつてんだろ…もおーっ…

兄は熱心な妹のリクエストにいやいや答えてしまう。

なつかしーっ、月島玄一郎くん、フビンだったわねえー。

なにがよお。

私ね、一度だけゲン兄ちゃんのラグビーの試合見に行ったことある。

イヤダッ！いつよおー、なんでよおー。

うーん、なんでだか忘れたけど…家族ぐるみで見に行ったのよ…ゲン兄ちゃん、すっげー内股だった。

うそよお。

ううん、とてつもなく内股で、パ。パ腕組みしたまますごい殺気でジーツとゲン兄ちゃんの走るとこ見てたもの。怖かったわよー、

うそよお。アタシ、ちゃんと、「男」して走ってたわよお。

ううん、ムチャクチャ内股だったのお。

違う！

だったの！

どらあ、サツちゃん、見てみて。

兄 妹 兄 妹 兄 妹

兄、走ってみる、内股である。

どう？

うむー？？？

サツちゃん、見てみて。

兄、再び走る。やはり内股である。

普通でしょ？

うむー？？？

サツちゃん、見て見て。

兄、走る。内股である。

普通でしょ？サツちゃん見て見て。内股ってこうよ。

兄、内股で走る。さっきとあまり変わらない。

兄、サツちゃん見て見て、外股ってこうよ。

兄、外股で走る。

兄、サツちゃん、見て見て。アタシってこうよ。

兄、走る。やっぱり内股である。

兄
普通でしょ？

兄が必死に部屋を走っている間、妹はそれを見ているようで見ていないようで、生返事をしながら箱の中を見やり他の物を発見する。

ゲン兄ちゃん、ゲン兄ちゃん、ほら、こんなまで入ってたあ。

妹
ハッハッハッ、(本当に息が切れている) サツちゃん、ハッハッハッ、サツちゃん、アタシの走り方、結局どうだったの？

妹
普通、普通。ほらこれ。

妹
早く言ってよお。もお。アラッ、イヤヨオーほんと嫌味なオヤジ。こんなのもう履かないって知ってるくせにい。

妹は靴をかかげたまま横を向いて口を微かにモゴモゴさせている。

兄
サツちゃん、今なんか言ったでしょ。

妹
…言った…。

兄
なんて言ったのよお。

妹
…デカイ…って言ったの。やっぱり足だけは男だよねえ、よっ玄一郎っ!! へ、へ、へ。
あの頃はわざと大きいの履いたの。サツちゃんだって。

兄も横を向いてモゴモゴさせる。

兄 妹 兄 妹 兄 妹

ゲン兄ちゃん、今なんか言ったでしょ。
言ったあ。
なによお。

自分はいつまでも小学生サイズのくせについて言ったの。
アツチャー、ここに来たかあ。まいったまいった……しかし“のみの夫婦”にも限度つてもんがあるわよねえ。ゲン兄ちゃんはママ似で、私はパパ似だもん。
そうだった。そうだった。あつ、サツちゃん。

今度は兄が妹の昔の服を見つけたようだ。

なんだかやあ。

サツちゃんも女の子してたことあるんだあ。やっぱり女の子だねえ、よつ、月島幸子ちゃん！
着てみて着てみて、罰よ罰。アタシ死ぬほど見てみたいの。見たいっつってんだろー！

ははあ。 (その服を着てみて) もおー。どうなのよ。
あら、意外と今でもいけるじゃない。

そうう？

なくんか、きもいコスプレよ。

なによ、ゲン兄ちゃんだつてきしよいコスプレよ。

それ、どういうことよ。

まんまの意味よ。

まんまってなによ。

“ふびんな子”って意味よ。

あんたなんか、“お気の毒な子ども”だったくせにい。

兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹

妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹
あんたなんかチヨク「みじめなお子さん」だったじゃない。
あんた兄ちゃんに向かって「あんた」ってことはないでしょ。
あんたに「あんた」って言って何処が悪いのよ。
不愉快なの。
あんた、あんた、あんた、
うるさい、うるさい、うるさい。
フンだ、アンタアンタ、アンタアくだ。

妹は悪態をつきながら、ドアの方へ行く。

妹 兄
どこいくのよ。
はばかり、はばかり。

兄はトイレに消えた妹に向かい

妹 兄
サッチちゃん、お互いの傷に塩の塗りあいっこするのもうやめましょ？ それに今日はママの三回忌だったのよ。ねえ、聞いてる？
はあーい。

兄は小包の中を見ながら、独り言のように

兄
そうよ、今日はママの三回忌だったのよ…ママ聞いている？ごめんなさいねママ。幸子、私が知らないうちにおっそろしく変わりもんになっちゃったわ。あっ…、アタシも他の人から見たらおっそろしく変わりもんの人間かもしれないわね。あ、これ…。

あつ、それ。

ママのシヨールだ…。

これ、よくして庭の花に話しかけてた。

そうだったっけ？

そうよ、ほら。「今年は良くがんばって咲いたわ、えらいえらい。」ってうなづきながら話しかけてた。

変な癖。：ほらこれ、ママのネックレス。ママの一番のお気に入りのパールのネックレス…。

ほんとだ。

これ、形見分けのつもり？ママ、あんまり大切にしすぎて、これいつもビロードのケースの中に入ってた。

…：これは？

ママの大好きだった本。ほら、ベケットの本。

ほんと？

ほら、子供の頃クリスマス・イヴの夜によくパパとママの前で、兄妹3人朗読させられたじゃない。

そうだったっけ。

何回も練習したじゃない。パパが帰ってくる前に。

ほんと？

ほら、(本のページを開き)「ここよここ。サツちゃん、ここ読んでじゃない。

え？「私を覚えていないのかい？…私を覚えていないのかい？ここへおいで」

「来いって言うてるんだ！なぜこんなに遅くなったんだあ！」

「そうガミガミ言わないで」…ああ思い出した。なんだかお経のようなお話しだったの思い出した。

そうそうそう、読んでる本人がさっぱり意味わかんかった話。でも、パパとママ本当に嬉しそ

うに聞いてたわ。変な夫婦…。

妹は肩にかけていたショールに鼻を近づけて

兄 妹 兄 妹 兄 妹
ゲン兄ちゃん…ママの匂いがする…。
ほんと？（ショールのにおいをかぐ）しないわよ…。
する。…ほら…ママの匂いがまだ残っているよお…。
どらあー。ぜーんぜん、しないったらあ。
するよお。…ほらあ。
どらあー。…しないったらあ。

と言いかけて兄は妹の様子に気づく。妹はショールに顔をうずめている。

妹
ゲン兄ちゃん…あたま…かぶして…。

兄は慌てて小包の中の他の布を妹の頭にかぶせる。妹は声を出さずに静かに泣く。

…泣くな…泣くな…泣くな…そんなに泣くとお月さまから大きなカマを持った、オニさんがさらに来るぞ…。
……。

“そのオニさんって、どんな顔？”って聞くのっ。

…そのオニさんって、どんな顔…
うーん…、高木ブーとカネゴンを足して二で割った顔。

妹は泣きベソの顔を布から出して。

妹
なんだ、それ。

兄、笑いながら。

兄
なんだ、それ。

ふたりは恥ずかしそうに微かに笑っていたが：妹は再び泣き虫の顔に戻る。

妹
まだ、泣き切ってないよおおー。

再び泣き出す妹のからだを支えながら、兄は天を仰ぐ。

兄
ママ聞いているかい？幸子をオニから助けてやってくれ…泣くな…泣くな…そんなに泣くとお月

妹
さまから大きなカマを持ったオニさんがさらいに来るぞ。
そのオニさんって、こんな顔！

面白い妹の顔が布から飛び出す。

兄
アハハハ、変な顔。

アハハハ…兄ちゃんベランダに出たい。

あーいよ。

兄はガタピシガタピシとガラス戸を開け、ふらつく妹を抱えてベランダに出る。

妹 兄 妹

なんだか、ほんとに、いい月だなあ。
ヒューヒュー満月う満月う。サツちゃん…今日お寺で、ママに言いに来たって言ったじゃない。
何言いに来たのよ。

うーん、なんだかなあ、ま、あれだよ…寂しかったり、めんどくさかったりするけど、重力重
かったりするけど…とりあえず…生まれてこなきゃ重力も感じないやね、松源の天ぷらうどんも
食べられないやね…ゲン兄ちゃんのそのチャン…

チャン・グンソクイムニダク

そうそうそれだ、そのチャン・グンソクイムニダーを知ることもなかったやね…とりあえず…マ
マ私を生んでくれて…ありがとう…つてとこかな…ついでに…パパにも…かな。

…お涙頂戴ね…

お涙頂戴、お涙頂戴。トホホホホ。

妹 兄

ふたりは泣き真似のような、でも本当に泣いているような、でもやっぱり泣き真似で泣く。

“ピンポーン”チャイムが鳴る。ふたりはお互いを不安気に見つめる。と同時にあたりに鳴り
響く荘厳な音楽。兄妹は恐る恐る頭上を見上げる。そこにはなにやら巨大な生き物が登場した
らしい。

声

ナグゴハ、イネーガア。ナグゴハ、イネーガア。

シーン3

月よりの使者はオニさん

兄妹は途端に「すみません、すみません」と口々に叫びながら舞台上を逃げ回る。一角に追い詰められた兄に声の主は

声 ナグゴハオメーガア！

兄は首を激しく横に振り妹の方を指す。

声 ムツ？（妹に向かい）ナグゴハオメーガア？

妹は首を激しく横に振り兄の方を指す。

声 ムツ？（兄に向い）ヤツバリオメエーガア！

兄は首を激しく横に振りながら

声 兄 誰も泣いでねえだあゝ
声 ホンドガア？

兄妹は首を激しく縦に振る。

声 嘘言ウデネードオ、嘘言ウダラ頭ガラガボガボド喰ウデヤルドオ！

兄妹
嘘でねえ、嘘でねえ、クワバラ、クワバラ…

二人はあまりの恐ろしさに震え上がる。

声
ソウガア：誰モ泣イデネーガア：ガツグリ、心ノ底カラガツグリ。

声
そして声の主は悲哀を込めて歌いだす。

♪ ナニガキミノ シアワセ ナニヲシテ ヨロコブ
ワカラナイママ オワル ソンナノハ イヤダ ワスレナイデ ユメヲ
コボサナイデ ナミダ ダカラキミハ トブンダ ドコマデモ♪
// アンパンマンのマーチ // より

恐怖におののいていた兄妹。兄がふと客席に目をやると、そこに黒子にかかえられたオニの形がその歌を歌っているのに気付く。妹も気付き、二人はその様子を呆然と見つめ続ける。どうもあのドスの利いた声はこのオニの人形からだったようだ。オニはどこか得意気に歌っていたが今度はなにやら呟きだした。

オニ
おトーチャン、おトーチャン、酒ばっかり飲んでないで少しは働いておくれよ。この子のミルク代だって、あーよしよし、ことかいてるんだよ。あ、おトーチャン、どこ行くんだよお、また酒買いに行くのかよお、おトーチャン、おトーチャン、"パチン"。

と、突然我に返ったようにオニは兄妹に問う。

オニ
トコロデドツチダア？

兄妹
オニ

へ？

“アルベールサン”ハ、ドツチダア？

オニ

それまで呆然と黒子とオニの人形の様子を見ていた兄妹は激しく首を横に振り、半ベソで互いを指差す。オニは兄妹を“ドツチダア、ドツチダア”と何度も見やり、終いには再び大声を出す。

“アルベールサン”ハ、ドツチダア！

一瞬の間

シーン4

ゴドーの世界

ウラジミール

私だよ…。私を覚えていないのかい？

すくつと背筋をのばしたのは黒子だった。

ウラ

私を覚えていないのかい？

黒子

はい…。

ウラ

本当に私を覚えていないのかい？

黒子 …はい…。

ウラ そんなことかと思った（間）。ここへおいで。（黒子、動かない）

エストラゴン （強く）来いって言ってるんだ！なぜ、こんなに遅くなったんだ？

ウラ ゴドーさんのことづてがあるのかね？

黒子 はい…。

ウラ そうか、言ってごらん。

エス なぜ遅くなったんだ？

ウラ （エスに）そうガミガミ言わないで。（黒子は二人をかわるがわる見て、どちらに答えていいかわからない）

エス （ウラに）おまえは黙ってな。（前に出て黒子に）いま何時だか知ってるのか？

黒子 でもボクのせいじゃありません。

エス じゃあ、俺のせいかな？

黒子 こわかったんです…。

エス こわいって、何が？鳥たちがかい？（間）返事をしたらどうだ！

ウラ わかっている。こわがらせたのはあの連中だよ。きみはこの土地の子か？

黒子 はい…。

エス 嘘っぱちだ！！（黒子の腕を取ってゆすり）本当のことを言うんだ！

（震えながら）でもそれが本当のことなんです。

いいから、そっとしといてやれたら。どうかしてるよ、おまえは。（エス、黒子を放すと、あ

とずさりして、両手で顔をおおう。ウラと黒子はそれを見つめる。エス、ゆがんだ顔を見せる）

どうしたんだ？

エス おれは不幸だ。

ウラ ばかええ！いつからだい？

エス 忘れた。

ウラ 記憶ってのはほんとにあてにならない。(エス、何か言おうとするがあきらめてびっこを引いてベンチに座りに行き、靴を脱ぎ始める。黒子に) それで？
黒子 (一気に) “ゴドーさん” が今晚は来られないけれど明日は必ず来るからと言ってくれと・・・。
ウラ それだけかい？
黒子 はい・・・。
ウラ きみはゴドーさんのところで働いているのかね？
黒子 はい・・・。
ウラ 何をしているんだ？
黒子 山羊の番です。
ウラ ゴドーさんはきみに優しいかい？
黒子 はい・・・。
ウラ 食べものはたくさんくれるかい？ (黒子ためらう) ええ？ゴドーさんは食べものをたくさんくれるかい？
黒子 はい。たくさん。
ウラ きみは不幸じゃないね？ (黒子ためらう) 聞いているのかい？
黒子 はい・・・。
ウラ じゃあどうなんだ？
黒子 ボク、わかりません・・・。
ウラ わたしと同じだ。(間) もう、行つていい。
黒子 “ゴドーさん” になんていえば？
ウラ そうだな・・・。(ためらう) わたしたちに会ったといいな。(間) そうだろ、きみは確かにわたしたちに会ったんだろう？
黒子 はい。(退き、ためらい、向きを変えると走り去る)

光がいきなり弱くなり、一瞬にしてもとの夜になる。月は舞台一面を銀色に照らす。木陰が少しゆれている。

ウラ やつとか。(エス、立ち上がってウラの方へ。片手に靴を一つさげて近づく。そして、舞台前面にそれを置くと、腰を伸ばして月を眺める) 何をしてるんだ、そこで。
エス おまえと同じさ。月の光を見る。

沈黙

ウラ もう、ここにいてもしかたがない。

エス ほかだつてだめさ。あーチクチクする。(エス、靴をはいてる方の足もはだしになる) デイデイ

ーこんどはこつちの足だあ。

ウラ なんだ、ゴゴー。そんなこと言うもんじゃやない。あしたになれば、万事うまくいくよ。だつてどうして。

エス あの子が言ったのを聞いていなかったのか？

いいや。

ウラ ゴドーがあしたは必ず来るつて言っていた。どうだ？

じゃあ、ここで待ってればいい。

ウラ ばか言っちゃいけない。夜露をしのがなくちやあ(エスの腕を取り)。さあ、行こう。(エスを引っ張る。エスは初めは従うがやがて逆らう。二人は立ち止まる。)

(木を眺めて) 綱一本なのが残念だ。

エス 行こうよ。寒くなつてきた。

ウラ あした、綱を持って来ることを思い出させてくれよ。

エス よしよし。さあ。(引っ張る。エス、また立ち止まる)

ウラ

エス もうどの位になるかな。こうして始終一緒になってから。
ウラ そうだな。50年位かな。
エス 俺がデュランス川へ身投げした日のこと、覚えているかい。
ウラ 葡萄摘みをしていたっけ。
エス おまえが俺を釣りあげちまった。
ウラ 過ぎたことさ、みんな。
エス 俺の服が日の光で乾いたっけ。
ウラ もう考えるなよ。さあ、行こう。(同じ動作の繰り返し)
エス ちよつと待てよ。
ウラ 寒いじゃないか。
エス お互いに別々に、一人でいたほうが良かったんじゃないかな。同じ道を歩くようにはできちやいなかつたんだ。
ウラ (怒らずに) どうか、それはわからない。
エス わからないって言ってしまえばなんだってそうだ。
ウラ 一人でいたんなら別れたっていいんだぜ。
エス 今じゃもう無駄だろう。

沈黙

ウラ そうだな。今じゃもう無駄だ。

沈黙

エス じゃあ、行くか？

ウラ ああ、行こう。

間

ウラ …二人は動かない…。

ふたりを優しく包むようにすでに音楽は流れ始めている。ふと夢からでも覚めたようなふたり。思い思いに先ほどの小包から出して着ていた服を脱ぎ、丁寧にたたむ。二人は寡黙である。兄はコートかけから自分のコートと帽子をとり着る。そしてバッグから明るめの口紅を取り出しゆっくりつける。妹は小包の箱を隣の部屋へ持って行こうとして、ふっと兄にふりかえる。

兄 妹 あした、ママのお墓に来る？
今夜ひとりで考えてみるわ。

兄妹は優しくほほえみあう。音楽、高くなる。

暗転

FIN

この作品を世界中のママと…パパ（にもかな…）へ、そして私の両親にささげます。

ボクと妹のいる風景 東京 くありがとうママンよりく
初版 平成二十三年十二月二十一日
編集・発行 劇団青い鳥
印刷 GIF
装丁 竹内謙太郎

© AOITORI

〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-4-6-32 KSハウス301
TEL 03-3486-7727